

【旧約聖書日課】エレミヤ書 1章4～10節

- 4主の言葉がわたしに臨んだ。  
5「わたしはあなたを母の胎内に造る前から  
あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に  
わたしはあなたを聖別し  
諸国民の預言者として立てた。」  
6わたしは言った。  
「ああ、わが主なる神よ  
わたしは語る言葉を知りません。  
わたしは若者にすぎませんから。」  
7しかし、主はわたしに言われた。  
「若者にすぎないと言ってはならない。  
わたしがあなたを、だれのところへ  
遣わそうとも、行って  
わたしが命じることをすべて語れ。  
8彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて  
必ず救い出す」と主は言われた。  
9主は手を伸ばして、わたしの口に触れ  
主はわたしに言われた。  
「見よ、わたしはあなたの口に  
わたしの言葉を授ける。  
10見よ、今日、あなたに  
諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。  
抜き、壊し、滅ぼし、破壊し  
あるいは建て、植えるために。」

【使徒書日課】使徒言行録 9章1～20節

- 1さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司  
のところへ行き、<sup>2</sup>ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従  
う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであ  
った。<sup>3</sup>ところが、サウロが狽をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの  
光が彼の周りを照らした。<sup>4</sup>サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わた  
しを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。<sup>5</sup>「主よ、あなたはどなたですか」  
と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。<sup>6</sup>  
起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」<sup>7</sup>同行し  
ていた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っ  
ていた。<sup>8</sup>サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。  
人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。  
9サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。<sup>10</sup>ところで、ダマス  
コにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、  
アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。<sup>11</sup>すると、主は言われた。「立  
って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、  
タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。<sup>12</sup>アナニアという人が入って  
来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見た  
のだ。」<sup>13</sup>しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレム

で、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。<sup>14</sup>ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。」<sup>15</sup>すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。<sup>16</sup>わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」<sup>17</sup>そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」<sup>18</sup>すると、たちまち目からうるこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、<sup>19</sup>食事をして元気を取り戻した。

サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、<sup>20</sup>すぐあちこちの会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。

### 【福音書日課】マルコによる福音書 1章14～20節

<sup>14</sup>ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、  
<sup>15</sup>「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。  
<sup>16</sup>イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。<sup>17</sup>イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。<sup>18</sup>二人はすぐに網を捨てて従った。<sup>19</sup>また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、<sup>20</sup>すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

### 呼ばれる【こども説教のために】

わたしたちは、今日も、それぞれの生活をしている場所から集められてきました。この時間に、他の用事をしていてもよかったし、自宅でのんびりくつろいでいてもよかったのですが、どういうわけか、礼拝する教会の集まりへと呼び出されてきたのです。ご自分の強い意志でそうなきったとお考えの方もいるでしょうし、日曜日にそうするのが習慣だからと言う方もあるかもしれません。

どういう理由をもってここに来られたにしても、確かなことがあります。わたしたちは皆、神を礼拝するところへと集められ、神の御前に進み出てきたということです。しかも、わたしたちが選り好みできる神ではありません。まことの神の御前に、わたしたちは立たせていただいているのです。まことの神が、どういうわけかお呼びくださったので、わたしたちは、ここに立つことが許されているのです。

主イエスの弟子たちは、自分から主イエスを選んで従うようになったわけではありませんでした。主イエスがお呼びになられたので、従うようになったのです。主イエスに呼ばれて従って行った先で、弟子たちは、まことの神の御前に立たされた者として生きることを知るようにされました。わたしたちも、弟子たちの教会を通して主イエスに呼ばれて、ここにいるのです。

## ついて行く

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」

主イエスが公生涯を通してお教えになられたことを端的に言い表すならばこうであると、福音書日課（マルコ 1 章）は宣言します。「神の国が眼前に迫っていることを知り、神の御前に立たせていただいていることを信じて、それにふさわしい生き方をしなさい」とお教えになられたのです。

わたしたちが教会に連なることを通して積み重ねているのは、至極単純なことです。神の御前に立たせていただいている者として生きる道へと繰り返し立ち帰ることです。主イエスは、その道の歩み方を、天の父の子らとされている者、神の子として生きることとして、実践してみせてくださったのです。そのお姿を弟子たちにお示しになられ、その後ろ姿によって弟子たちを導かれました。

主イエスの最初の弟子となった四人の漁師たち、シモンとアンデレ、ヤコブとヨハネ、この二組の兄弟たちは、お呼びかけくださって、「わたしについて来なさい」と告げられた主イエスに、すぐに従ったと、伝えられています。シモンとアンデレは漁で使う網を捨てて、ヤコブとヨハネは父ゼベダイと雇い人たちを残して、主イエスについて行った、というのです。

少しばかり軽はずみな行為に思えます。おそらく、この逸話は、四人そろっての証言というよりも、シモン=ペトロの証言に基づいているのでしょう。「マルコ福音書」は、シモン=ペトロの少しばかり軽はずみなどころのある姿を、繰り返し伝えているのです。

シモン=ペトロは、そのとき、主イエスから「人間をとる漁師にしよう」とお声がけいただいたのです。彼は、漁師として生計を立てていました。弟アンデレも一緒に仕事をする家族経営でしたが、漁業者としての経営は安定していたのでしょうか。彼は、妻を迎え、その義親も養える家を構えていたようです（マルコ 1:29 以下）。とは言え、友人のヤコブ兄弟の家と比べると、見劣りがすると思っていたかもしれません。ヤコブたちは、父ゼベダイを筆頭に、幾人もの雇い人を抱える事業者として成功していたのです。「人間をとる漁師にしよう」という誘いは、シモン=ペトロにとって、将来への期待を抱かせるに十分なものであったのではないのでしょうか。「この人について行けば、事業経営者として成功できるかもしれない」と。

もちろん、この逸話を証言したときのシモン=ペトロは、もはや、そのようには考えていなかったでしょう。主イエスに対して最初に抱いていた期待と、最後に知るようになったこととの間には、確かに大きな隔たりがあったはずです。それは、しかし、この方について行って見なければわからなかった。否、ついて行って見ればわかる。そう彼は証言したのではないのでしょうか。

## 見えるようになる

シモン＝ペトロのことをそのように話すのは、わたし自身の信仰者としての歩みを重ね合わせずにいられないからです。

わたしは高校二年生のクリスマスに洗礼を授けていただきましたが、あまり深く考えずに受けたのです。ある日曜日の夕方、教会から帰ろうとして中庭に出ていたとき、牧師から「そろそろどうですか」とだけ言われて、軽率にも「はい、そう考えていました」と答えてしまったのです。本当は、何も考えていませんでしたが、何につけ「考えていない」と口にするのが格好悪いと思っている小憎たらしい少年だったのです。信者の家庭に生まれ育ち、姉も兄もすでに洗礼を受けていましたから、受けること自体に抵抗はなかったのです。けれども、受けて信者になる理屈が、16歳の少年には必要でした。洗礼準備のために呼ばれた牧師との面談で、わたしは、随分生意気なことを大上段に構えて話したのです。それから36年、主イエスに従う歩みを重ねさせていただいてきました。今は、16歳のときのような生意気なことを口にする勇氣はありません。ただ、教会に連なる者として、主に従う人たちと共に神の御前に進み出させていただくたびに、主イエスが弟子たちにお見せになられた後姿を強く意識しないではいられなくなっています。

わたしは、まだ洗礼を受けていない方に面と向かって勧めることはほとんどありません。けれども、説教卓からは申し上げたいのです、「そろそろどうですか」と。主イエスに呼ばわれて、「はい」と従ってみる。そこから、始まるのです。そこから、主がお示くださるとうしていたことを見つめ続ける歩みが、始まるのです。神の御前に立たせていただいている者として、それにふさわしい生き方をする歩みです。

それは、自分自身ばかりを見つめすぎない生き方です。神の御前に進み出ることを通して、神を見つめ、神の見つめられる眼差しの中を歩む生き方です。主のご覧になられている眼差しの先を、共に見るのです。

荷物の配達員の方が、掲示板の説教題を見て感じるものがあつたと話してくれました。「収入を得るためではなく、自己実現のためでもなく、自分にふさわしい仕事として、今の仕事を《天職》と知っている」と言っていました。

主イエスに従うとき、わたしたちは、自分の仕事や生活を捨てることはいでしょう。ペトロらも、実のところいつでも漁師の生活に戻ることができたのです。ただ、彼ら弟子たちは、《天職》を知るようになりました。「神から与えられた働き」を果たすことを願わずには、何もしなくなりました。神の御前に立つようと呼びだされたのは、何のためだったのかを、人生をかけて考え続ける歩みをいたしました。その弟子たちに、わたしたちも続くのです。主イエスが始められた歩みを、わたしたちも続けるのです。